

「令和5年度群馬県立自然史博物館活動の評価」について

群馬県立自然史博物館専門委員 小田川浩道

令和5年度の観覧者数は企画展「ポケモン化石博物館」の盛況によって目標を4万1千人あまり上回り、過去最多の29万1128人となった。国民的な人気キャラクターとのコラボとあって、会場のあちこちで記念撮影したり、古代生物の化石に興味深く観察したりする子どもたちの姿が見られた。本県で発見されたイルカやカメなどの化石も展示され、太古から続く進化の歴史を知る貴重な機会を提供する展覧会となった。

一方、懸案となっていた収蔵スペースの問題は解決の目途が立っていない。標本箱は天井まで山積みとなり、狭い通路は動物のはく製が埋め尽くす。資料を取り出すには煩雑な作業が必要となり、破損の恐れも危惧される。

こうした問題は全国の博物館に共通する悩みだ。奈良県立民俗博物館は収蔵庫からあふれた資料の整理ため休館を余儀なくされ、同県は基準を設けたうえで一部廃棄を検討している。破棄について専門家が反対の声明を発表し、再考を促す事態となっている。

問題を放置すると重要資料の収集機会を逃す恐れがあるほか、保存環境の悪化はカビの発生にもつながる。開館30周年の節目を一つの区切りとして、県として方向性を早急に示すことが求められる。

資料を虫やカビから保護する「燻蒸」についても新たな問題が浮上した。博物館で一般的に使われてきた薬剤「エキヒュームS」を扱ってきたメーカーが環境への悪影響から2025年3月末での販売終了を決めた。従来の燻蒸庫は使えず、代替ガスは作業を担う業者に限られる。虫の捕獲トラップを活用しながら収蔵庫の状態を監視し、資料の保全に万全を期してほしい。

群馬県と米国インディアナ州との連携協定に基づき、県立自然史博物館ではインディアナポリス子ども博物館からスタッフを招き、ワークショップを開催した。相互訪問を進めながら信頼を醸成し、展覧会を共催するなど連携の成果を示してほしい。

収蔵庫には寄贈された多数の個人コレクションがあった。昆虫や化石など膨大なコレクションと郷土のコレクターを紹介する企画展の開催を期待する。